略奪監禁

【キャラクター】

・鷹司傑（たかつかすぐる）　２８歳
厳格な父と優秀な兄をもっている。
両者とも監禁癖のあるヤンデレであり、
鷹司傑は愛着はあるものの「うちの家族頭おかしい」と思っていた。
自分だけは「本物の愛情」を理解していると自認しており、
いつか運命の人と「普通に」愛し愛されるのだと決めていた。
しかしその計画は、一目惚れしたヒロインに恋人がいたことで跡形もなく崩れ去る。
すこし神経質な面があり、パニックにもなりやすい。
鷹司秀（兄）よりやや細マッチョ

・金山晃（かなやまあきら）２２歳
当て馬。ヒロインの恋人。チャラめ。
ごく普通にヒロインと付き合っていたが、
それが鷹司傑の恨みを買い殺されることとなる。
ガシマン。

トラック①

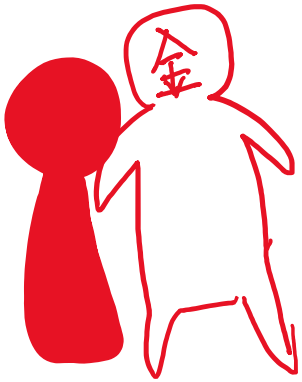
数日前にヒロインに一目惚れした傑。
道端で告白してみるが、ヒロインにはすでに恋人いることが判明する。
傑はあからさまにショックを受け、半ば茫然自失といった状態で引き下がる。

【飲み会帰りに夜の街を歩くヒロインと金山】

SE:雑踏
SE:二人分の足音

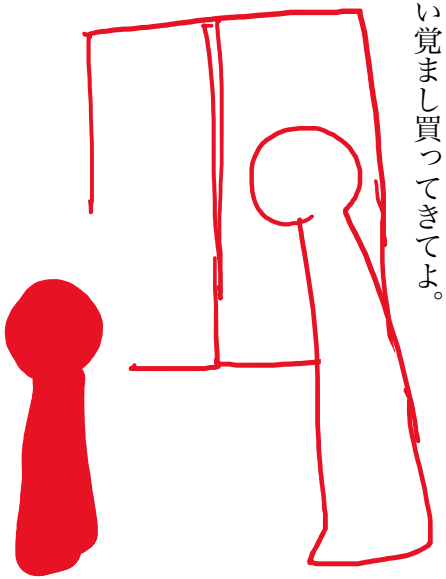
【3　酔っ払い、ご機嫌】
金山「あ〜、ふらふらするぅ。
　ちょっと、飲みすぎちゃったな」

【ヒロイン「もう少しセーブして飲みなよ」】



金山「何、お説教？　せっかくいい気分だったのに。
　仕方ないじゃん、先輩が飲めっつーのに、断るわけに行かないだろ？
　ん〜……ちょっと気持ち悪くなってきた……
　あ、そこのコンビニで、適当に酔い覚まし買ってきてよ。
　俺ここで待ってるから」

SE:しぶしぶコンビニに向かう足音
SE:自動ドア開閉
SE:横から傑が歩いてくる



【11　数歩離れて　緊張気味】
傑「……あの、こんばんは」

【ヒロイン、傑に振り向く】

【1】
傑「すみません、急に声をかけて……。
　僕、鷹司傑（たかつかすぐる）って言います。
　ええと……あ、そうだ。これ、名刺」

SE：懐ガサゴソ
SE:名刺ケース開ける
SE:名刺差し出す

【有名な大手会社の名刺に、少々驚くヒロイン】

傑「え？　あぁ、この会社、知ってる？
【ほっとして】よかった。名前の通った会社に所属してるメリット、
今日初めて感じたかも。
今の僕、めちゃくちゃ怪しいと思うけど、
書いてある会社に連絡してもらえれば、僕の身元はちゃんとわかるから」

【ヒロイン「その大手会社の社員さんが、何かご用ですか？」】

傑「ご用っていうか……
ちょっと、話したくて。
【気まずそうに】ごめん、いきなり意味わかんないよね」

傑「【深呼吸】あの、実は僕、
先週あなたがこのコンビニから出てくるのを見て……
一目惚れしました。
どうしても、もう一度会いたくて……
このコンビニで待ってれば、また会えるかもしれないって思って、
それで……
急にこんなこと言われて、困るかもしれないけど、
まずは僕とお友達に――！」

SE:コンビニ扉開閉
SE:金山が近づいてくる足音

【金山、ヒロインに文句を言うためにコンビニまで来たが、知らない男と話しているのを見て不思議に思う】

【10　不機嫌→怪訝】
金山「あのさぁ〜……！
酔い覚まし買うのに、どんだけ時間かかってんの？
てか外あっついんだけど。【嫌味で】俺が買いにくればよかったわ……
うん？　何？　どしたの？　絡まれてんの？」

【1】
傑「【怪訝そうに】……君は？」

金山「俺？　彼氏だけど」

【3　ヒロインの真横に立つ】
金山「【刺々しく】あんたこそ、何？
【馬鹿にして】まさかナンパ？　コンビニで？
ちょっと場所考えろよな！」

【1　ショック】
傑「……恋人が、いたのか……」

【ヒロイン「ごめんなさい」】

傑「あ、謝らないで……！
僕こそ、申し訳ない。
困らせちゃったよね……
君みたいに素敵な人なら、恋人がいて当然だ。
馬鹿だな、僕……浮かれちゃって……
そんな当たり前のこと……」

【3】
金山「【ヒロインと腕を組む】おい、行こうぜ」

SE:二人分の足音
SE:コンビニ開閉

【3　一緒に歩きながら】
金山「……あ〜、びっくりした。
まさか俺がいない一瞬で、ナンパされてるなんてなぁ。
しかもあんな、イケメンに。
酔い覚まし買いそこねたけど、一気に酔い冷めたわ。
いいスーツ着てたよな。背も高かったし。
【ワクワク】名刺もらったんだろ、見せてくれよ」

【ヒロイン、名刺を見せ、金山を見る】

SE:名刺渡す

【1】
金山「うわっ、大企業じゃん。
イケメンで高身長で金持ちって、出来過ぎ（笑）
お前なんかにゃ、もったいないって（笑）」

【ヒロイン「ひどい！」】

金山「怒るなって、冗談だろ？
そんな反応するってことは、ぶっちゃけ、
まんざらでもなかったんじゃないか？」

【ヒロイン「バカにしてる？」】

金山「冗談だよ、冗談。
お前は俺一筋だもんな？
身持ちの硬い彼女がいて、俺ってば幸せ者（笑）【額にキス】」

【ヒロイン「外ではやめて」】

金山「いいだろ、ちゃんと俺の彼女ですってアピールしとかないと、
また誰かに告られちゃうかもしれないし……
【甘い感じで】なあ、しばらく夜は一緒に帰ろう。
あんないい男が、急にナンパしてくるなんて……
どう考えても、何かの詐欺だよ。
うっかり二人きりで会ったりしたら、
さらわれて内臓取られたり……」

【真剣】
金山「これは本気。
なんかあったら、俺が絶対守ってやるから。
安心して、俺のこと頼ってくれよな【再度額にキス】」

SE:二人の足音

トラック2

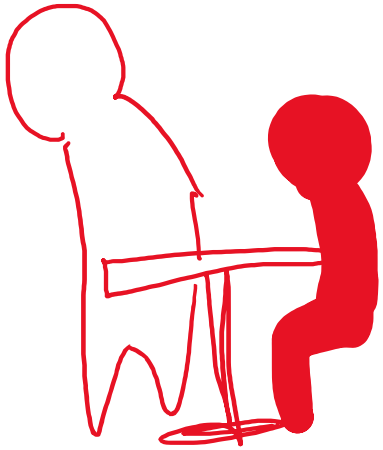
夜、ヒロインが一人で店で食事をしていると、急に目の前の席に傑が腰を下ろす。
「は？」と思うヒロインに、傑は「あの男はやめた方がいい」と真剣に説得をはじまるが、ヒロインは言うことを聞かないので、傑はヒロインの拉致に踏み切る。
店の客も店主も全員傑に雇われている邪悪なフラッシュモブ。

SE:お店のBGM
SE:がやがや
SE:食器かちゃかちゃ
SE：16の向こうから近づいてくる足音

【16】
傑「こんばんは。ちょっと相席してもいかな？」

【ヒロイン、ぎょっとするが傑はそのまま座る】

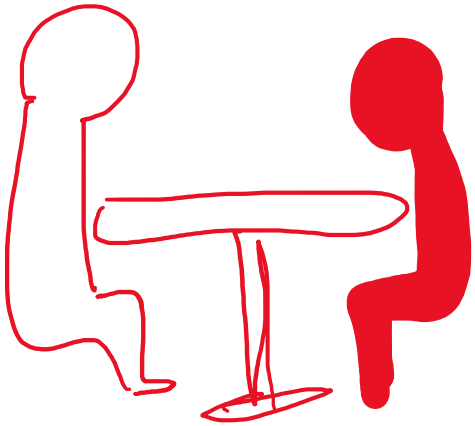
SE:椅子の音
SE：座る



【1】
傑「あぁ、僕のことは気にしないで、そのまま食べて。
この店、君のお気に入りだもんね。
ええと……覚えてるかな？
ほら、この前コンビニで名刺を渡した〝怪しい男〟。
そう、鷹司傑です」

【ヒロイン「詐欺なら間に合ってます」】

傑「へ？　詐欺？　って……なんの話？
僕が君を詐欺にかけるってこと……？」



【1】

傑「あっははははは！　そんなはずないじゃないか。
それ、君の彼氏に言われたの？
僕が君を詐欺にかけようとしてるって。
言いそうだよねぇ、あの男。
【ここだけ低く】ほんと、救えない……。
この前言った通りだよ。君に一目ぼれしたから、話したい。
それだけなんだ」

【ヒロイン「鷹司グループの御曹司だって】

傑「ん？　あぁ……僕のこと、ネットか何かで調べたんだね。
そう。一応、あの鷹司グループの一族。
まぁ、僕は次男だから、兄さんのサポート役っていうか、
兄さんが死んだとき用のスペアだけど」

【ヒロイン「そんな人が、どうして私に？」】

傑「ん？　そうだなぁ……
僕も結構悩んだんだよ。僕が君を好きになった理由。
どうしても君じゃなきゃいけない理由。
でも、見つからないんだ。
わからない。
でも、どうしようもなく、君じゃなきゃダメだって思うんだ。
ずっと君の姿を見ていたいし、ずっと君の声を聞いていたい。
君を苦しめるすべての物を、
めちゃくちゃにしてやりたいくらい憎いと思う。
理屈じゃなくてさ。
呪いみたいな運命に捕らわれて、自分ではどうにもできない。
――そういうのって、ない？」

【ヒロイン「よくわからない」】

傑「【苦笑い】わかんないか……そっか。
【一点明るく】だよね。僕もわかんなかった。
君に会うまで、運命だとか、愛だとか、幻想だって思ってたんだ」

【1】

傑「なのに今、毎日毎晩、
君のことしか考えられないくらいで……。
だから……今から少し、真剣な話をします」

【傑は金山の身辺調査の結果、ヒロインにまったくふさわしくないどころか、害をなす存在と判断しており、犯罪組織からヒロインを救い出すくらいの真剣さでのぞむ。ヒロインの〝洗脳〟が解けないなら実力行使も辞さないかまえ】

傑「君の彼氏の、カナヤマ　アキラだけど……
【嫌悪にじませ】どうしようもないクズ野郎だ。
君をまるで自分の所有物みたいに扱って、
君の優しさに付け込んで、まるで母親に甘える子供みたいだ。
あの男から、君にアプローチしてきたんだろ？
でも、あいつは君を愛してるわけじゃない。
かわいくて、優しくて、扱いやすそうだから君を狙ったんだ。
連れ歩いて、周りの連中に自慢できるようにってね」

【ヒロイン「そんなに悪い人じゃない」】

傑「君は騙されてるんだ……！
ねぇ、よく考えて。このままあの男と一緒にいて、
君は本当に幸せ？　幸せになれる？
あいつは君より都合のいい女が現れたら、
簡単にそっちに乗り換えるよ。
命の危険がせまったら、君を犠牲にして助かろうとする。
この前だって……！」

【ヒロイン、勢いよく椅子から立ち上がる】

SE：椅子ガタン！

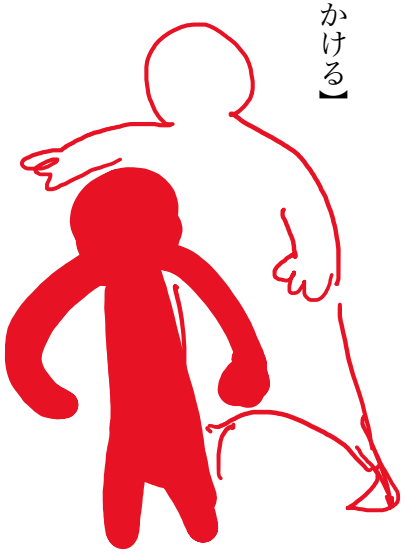
傑「ど、どうしたの？　急に立ち上がって……」

SE：ヒロインが立ち去る足音

【傑、ヒロインが怒って立ち去ろうとするので、慌てておいかける】

【12　ヒロインを追いかけながら】

傑「あ、待って……！
ねぇ、話を最後まで聞いて。
僕は君を助けたいだけなんだ。
お願いだよ……！
耐えらないんだ、君があんなクズの恋人扱いされるのが……！」



SE：足跡ストップ
SE：レジの人を呼ぶベル鳴らす

【レジの人を呼ぶが、誰も来なくて焦るヒロイン。しかし傑は誰も来ないことを知っているので、そのへんは焦らない】

【4】

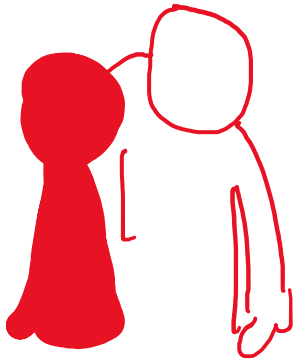
傑「どうして無視するの？
【なだめるように】席に戻って、話の続きをしよう。
ほら、スタッフも忙しくて、今はレジ対応できないみたいだし。
それとも、お店をかえようか。
もっと静かで、落ち着けるバーがある。
ドレスコードがあるけど……途中で君に似合う服を買っていこう」

SE：ベルめっちゃ鳴らす（数回鳴らして止めてください）

傑「困ったな……ねぇ、わからない？
ほら、よく見て。
店のスタッフも、お客さんも……みんな君を見てない。
どうしてだと思う？」

【3　背後から】

傑「【内緒話をするように】君は今、この店では透明人間なんだ。
このお店、実は一年前から僕が経営してるんだけど、
今は防犯カメラも切ってある。
普通にしてるお客さんも、今日は全員、僕の部下だ」



【ヒロイン、怯えて振り返る】

SE：衣擦れ

【1　優しく説得するトーン】

傑「これで、少しは分かってくれた？
君のためだったら、僕はなんでもできるんだって。
ねぇ、言ってみて。僕に何をしてほしいか。
君が欲しものを、上から順に言ってくれれば、
それを用意してあげる。
行きたい場所があるなら、今すぐ連れて行ってあげる。
嫌いな奴がいるなら、電話一本で消すことだってできる」

【1→7　耳元で】

傑「だから……ね？
あんなくだらない男はやめて、
僕を好きになってよ」

【ヒロイン、傑に背を向けて店から飛び出そうとするが、傑はそれを捕まえて背後から抱きすくめる】

SE:ヒロインが駆けだす

SE：傑が抱き寄せる

【5→4】

傑「あ、待って……！　ダメだ！」

SE：暴れるヒロイン

傑「落ち着いて、暴れないで！　いい子だから……！」

【ヒロイン「警察を呼びますよ！」】

【4】
傑「【ヒロインを押さえつけながら】け、警察？
【困惑】どうして、そんなもの呼ぼうと思うのかな……！
僕はただ、君をクズ野郎から助けようとしてるだけでしょ？
君に最高の人生をプレゼントするって、言ってるだけだ。
なのにそんな……犯罪者みたいな言い方……！」

【ヒロイン、彼氏の名前を叫ぶ】

傑「【傷ついて】は？」

SE：ヒロインをこっちに向かせる
SE：壁に押さえつける

【傑、後ろから抱きすくめていたヒロインの体をこちらにむけ、壁に押さえつける】

【1】
傑「【困惑】なんで今、あんなクズ男の名前を呼ぶんだよ……
あいつに助けてほしいってこと？
この、僕から？
どうして、そんな……
【だんだんイラついて】僕よりあんな男を選ぶっていうの？
僕よりあいつの方が上だって？
そんなはずないって、少し考えればわかるだろ！」

【1】
傑「ほら、よく見て、考えて。
僕とあいつを比べてみなよ。
僕と比べて、あいつが勝ってるところがどこにある？
まさか、体の相性？
僕の情熱が足りない？　言葉だけじゃ伝わらない？
だったら、いくらだって……！【言いながら無理やりディープキス】」

【無理やりディープキス三十秒ほど】

【1】

傑「【うっとりして】ん……はぁ……
ね？　ほら……キス、気持ちいいでしょ？」

【ヒロイン「家に帰らせて」と泣く】

傑「ダメだよ、君は家に帰れない。
帰さない。
でも、こんなところじゃ恥ずかしいよね。
やっぱり、場所を変えようか。
君とゆっくり愛し合える場所に。
だから――少し眠ってて」

SE：スプレーを噴霧する音
SE：ヒロイン数歩よろける
SE：ヒロインくずおれる
SE：傑が抱きとめる

【ヒロイン、睡眠薬を噴霧されて意識もうろうとする】

【3】

傑「おっと……！
ふふ、可愛い寝顔……。
ごめんね、こんなことして。
でも、きっと君を説得してみせるから。
やっと出会えた……僕の運命の人」

トラック③

突如誘拐され、監禁部屋で目覚める。
状況が飲み込めないヒロインに、傑が語りかける。
「君が欲しいものは、何でも用意してあげる。だからオレのこと好きになってよ、ね？」
改めて鷹司傑から告白を受けるが、当然拒否。
しかし鷹司傑は受けいれず「僕の方があんな男よりいいってわからせてやる」「君が僕を受け入れないなら、こうするしかないよね（？）」と、丁寧ネチネチレイプ。

場所：屋内
時間：不明

【鷹司傑の家の一室で、目覚めるヒロイン】

SE:15　傑が本をめくる音
SE:ヒロイン、ベッドの上で身動ぎ

【ベッドサイドの椅子に座っている傑】

【15　穏やかに】
傑「ああ、起きたんだね。おはよう」

【ヒロイン、動揺しながら身を起こし、傑を見る】

【9→7】
傑「急には動かない方がいい。
まだ薬が抜けきってないだろうから……
おっと……！」

【めまいで体勢を崩したヒロインを、傑が支える】

SE：抱きとめる

【7】
傑「【優しく】ね？　くらくらする。
少し水分を取った方がいい。
もう十時間以上眠ってるから……」

【傑、話しながらサイドテーブルに向き直り、コップに水をそそぐ】

SE：水差しからコップに水をそそぐ

【傑、ヒロインにコップをさしだす】

【1】
傑「はい、お水」

【ヒロイン「どうして私の部屋に？」】

傑「ん？　あぁ、この部屋？
君の部屋にそっくりでしょ。
でも、ごめんね。
ここは君の部屋じゃないんだ」

【ヒロイン、わけがわからず戸惑う】

傑「アクアリウムって、わかるかな。
珍しい熱帯魚をさらってきて、
その熱帯魚が暮らしてた環境を、
人工的に作って飼育するんだ。
水質も、水温も、水草も……
全部全部、大切な一匹のために整える。
訳が分からないなって思ってたんだ、前までは。
でも、楽しかったよ。
こうやって、君の部屋を僕の家に作ってる時間は、さ」

【1】

傑「あぁ、でも、結構違うところもあるんだよ。
ほら、向こうのソファ見て。
【明るく】じゃーん、君が欲しがってたぬいぐるみ。
ネットショップで、何回も見てたでしょ？
ぬいぐるみにしては、ちょっと高級だから我慢してたのかな。
一緒に暮らし始める記念に、僕からのプレゼント」

【ヒロイン「一緒に暮らす？」】

傑「あぁ、そうだよ。
君は今日からこの部屋で、僕と一緒に暮らすんだ。
【軽く笑いながら】あーあ。〝何言ってるんだ、この異常者〟って顔してる。
うん、まあ……わかるよ。
僕もすごく悩んだ。でも、こうするのが一番いいんだ。
君も、すぐにこの生活に慣れるよ。
君が欲しいものは、なんでも買ってあげる。
【部屋を見回しながら】部屋の内装だって、
今は君が落ち着けるようにと思って、
前に住んでた部屋と同じにしてあるけど……
もっとお姫様みたいな部屋がよければ、そうするし」

傑「今は全然納得できないかもしれないけど、
いつか僕にさらわれてよかったって思えるよ。
【無邪気】だってほら、君、僕みたいな顔好きでしょ？」

【1】

傑「経済力だって、こんなことできちゃうくらいあるし、
料理だって上手い。
趣味も多いから、君と話も合うと思う。
もし僕に足りない部分があるなら、
それだってちゃんと補うさ。
君のためなら、どんなことだってしてあげる」

【ヒロイン、ベッドから飛び降り、玄関を目指して走る】

SE：走る音
SE：がちゃがちゃがちゃ
SE:ドンドンドン！

【13がっかり】
傑「また逃げようとするんだ……
【くそでかため息】本当に、馬鹿な女だな……」

SE：ヒロインの背後に迫るゆっくりの足音

【13→5　歩きながら】
傑「ねぇ、僕の話聞いてた？
君の部屋とそっくり同じ内装の部屋を用意して、
君をさらって、一緒に住むって言ってるんだよ？
一方的にさ。
完全に計画的だ。
それなのに――」

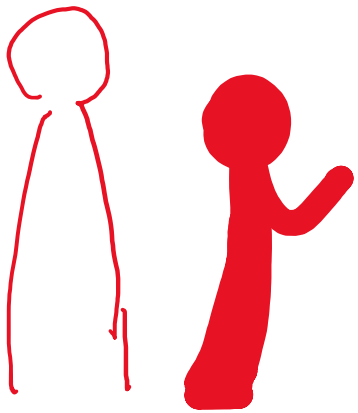
SE：足音、ヒロインの真後ろでストップ
SE：ドアガチャもストップ「

【傑、ヒロインの背後に立ち、耳元でささやく】

【6　耳元】
傑「部屋の内側から、ドアが自由に開くわけないじゃないか。
君は――
【限界まで近く】もう、ここから出られないんだよ。
僕がいいって言うまで、ね」

【ヒロイン、破れかぶれで暴れ出す。弟を殺して逃げ出す勢い】

SE：ヒロイン大暴れ



【1　揉み合いながら】
傑「おっと……！
ダメだよ、暴れたら……！
暴れたってどうにもならないんだから。
ほら、大人しくしろって……！」

SE：壁にヒロインを押さえつける
SE：暴れる音ここまで

【ヒロイン、「ひどい」と泣く】

【1　至近距離で】
傑「ひどい？　なんで？
そんなの、こっちのセリフだよ！
【泣きそう】全部上手くいくはずだったんだ……！
お前がそんなに馬鹿じゃなければ！
あんなやつじゃなくて、
僕を選ぶべきだって理解できるだけの常識と頭があれば！
僕だってこんな頭のおかしい事しなくてすんだんだ！」

SE：ヒロインの顔の横のドアを殴る

【ヒロイン、暴力の気配におびえて硬直する】

【1　少し離れて】
傑「【はっとして】ごめん……怖いよね。
でも、もう、僕も何がなんだかわかんないんだ。
君を好きになってから、僕の中で僕がどんどん壊れてく。
こんなことしたくなかった。
僕だけはちゃんと、お嫁さんを幸せにしようって、
決めてたのに……はは、意味わかんないよね。
君にとっては、ただのストーカーの譫言（うわごと）なんだろうし……」

【1→3】
傑「大丈夫だよ、痛いことは絶対にしない。
しばらく君の生活を見てたから、
好きなものも嫌いなものも、大体わかった。
快適な生活を約束するよ。
これからも何か欲しい物があれば、全部買ってあげるから……
だから……」

【傑、ヒロインの耳にキスする】

【3　耳を舐めたり、噛んだりしながら】
傑「ね……ちゃんと、恋人になろう。
こうやって、ちゅ……耳、舐められるの……ちゅ、ちゅ……
好きでしょ？」

【ヒロイン、犯されることを察して泣き出す】

【優しくなだめるように】
傑「泣かないで、大丈夫だよ……ちゅ、ちゅ……怖くない。
じゅる、れろ……
これから毎晩することの、最初の一回が今日なだけだ。
ん、ちゅ……ちゅ……」

【傑、ヒロインの耳にキスしながらヒロインの胸に触れる】

傑「……ふふ、おっぱい柔らかいね。
君に一目惚れしてから、ずっと想像してたんだ。
君の肌はどんな手触りで、どんな味で、
愛し合う時は、どんな声をあげるのかなって……
【耳に長めにキス】」

傑「乳首、だんだん硬くなってきた……
気持ちいいの？　僕も♡
君に触ってるだけで、脳がとろけちゃいそうなくらい嬉しい。
あぁ、本当に気持ちいいな。君はどう？
気持ちいいよね？」

【1】
傑「そんなことない？　ほんと？
【意地悪く】えー？　じゃあ、確かめてみよっか。
ほら、スカートのすそ、口にくわえてて。
よっ、と…」

【傑、スカートのすそをヒロインの口にくわえさせ、
下着の上から片手でヒロインの股間に触れる】

SE：スカートをまくる水音
SE:触れる水音

傑「【嬉しそうに】はは、濡れてる♪
下着の上からでも、ほら……くちゅくちゅって……♡
やっぱり、気持ちよかったんだ。
あぁ、恥ずかしがらないで。
嬉しいんだから」

【唇に軽いキスを繰り返しながら】
傑「君に喜んでもらえるように、たくさん勉強したんだ。
どうしたら、女の子が気持ちよくなれるのか。
心配しなくても、いきなり指を突っ込んだりしないよ。
ほら、濡れた下着の上からこうして、
撫でてるだけで……」

SE：ゆっくりめに水音ねちねち

傑「ね？　気持ちいい」

【感じ始めるヒロインの様子に、気を良くする傑】

【7　囁くように】
傑「声、我慢しなくていいのに。
お隣さんなんかいないから、遠慮しないで。
ははっ……君のここ、ちょっとおっきくなってきたね♡」

傑「このくらいの強さで触られるのがいいんだ。
いいよ。君の好きなように、いっぱい弄ってあげる。
君の可愛い声、聞かせて？【耳にキス】」

傑「ほら、恥ずかしがらないで。
気持ちいい、気持ちいい、って腰動いてる。
んー？　布ごしじゃ、ちょっと刺激足りないかな？
じゃあほら、爪で優しくひっかいてあげる♡
ほら、かりかりって……」

【ヒロイン絶頂してその場にくずれおちる】

SE:衣擦れ
SE:くずおれる

【1　上から】
傑「あはは。気持ちよくて、腰抜けちゃった？
かわい〜（笑）」

【傑、へたり込んでしまったヒロインをお姫様抱っこでベッドに運ぶ】

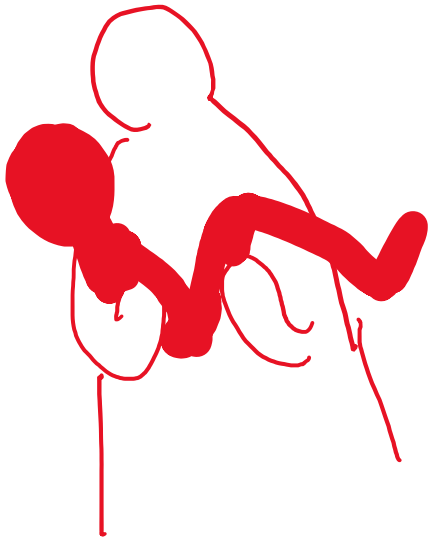
【2】
傑「さ、おいで。続きはベッドで……しよ♡」

SE：ヒロインを抱き上げる
SE：ベッドへ移動
SE：ヒロインをベッドに
SE：傑がベッドに上がるきしみ

【ヒロインと傑、ベッドの上に向かい合って】

【1】
傑「服、脱がせちゃうね」

SE：脱がせる衣擦れ



傑「あぁ……綺麗だ。
君の体は、どこもかしこも、すごく……
でも――」

【傑、ヒロインの体に金山がつけたキスマークを見つけて、イライラしながらヒロインの体を隅々までチェックする】

【1の位置でヒロインの位置をあちこち眺めながら】
傑「あいつが付けた痕があるね……気付いてなかった？
全部、僕で上書きしなきゃ……
君はもう、僕の恋人なんだから。
まずは、首の後ろ」

【5　傑、首の後ろでキスマーク付ける音】

【1　下から】
傑「次はここ。太ももの内側。――ほら、あおむけになって、足あげて。
僕がキスしやすいように」

【傑、太ももの内側にキスマーク付ける音】

傑「あーあ。こんなとこにもある。知ってた？
ここ……膝の裏側」

【傑、膝の裏側にキスマーク付ける音】

【一連の流れで、ヒロインはベッドにあおむけに横たわり、傑に片足を抱えあげられている体勢になっている】

【1】
傑「うん、これでいい。
さぁ、続き……しよっか。
君のここも、もう待ちきれないみたいだし……」

SE：触れる水音

傑「すぐにでも入れられそうなくらい、
ぬるぬるしてる。
わかる？　ほら、中の方も……」

SE:指挿入

傑「【嬉しそうに】どんどんあふれてくる。
僕の指、そんなに気持ちよかったんだ。
それともキスの方？
嬉しいな……君が僕で感じてくれてるの、すごく嬉しい。
でも、まだちょっと狭いかもだから、もう少し慣らすね」

SE:手マン（低速→中速）

【ヒロイン、初めての快楽に戸惑う】

傑「ん？　なに？　気持ちいのが不思議？
そうだよね、君の彼氏は、痛がってるのか感じてるのか、
区別できないような男だもんね。
セックスって、本当は気持ちいいんだよ。
僕が全部教えてあげる」

SE:手マン加速

傑「いいよ、このままイって。
ほら、僕の指で、思い切り気持ち良くなってよ」

【ヒロイン絶頂】

SE:手マン終了
SE:指を抜く

【3　耳元で優しく】
傑「よしよし、上手にいけたね。
でも、まだ始まってもいないよ。
これからもっともっと気持ちよくしてあげる」

傑「さあ、足を開いて。あいつより大きいから、苦しいかもしれないけど。
ちゃんと気持ちよくなるように、頑張るから……さ！【挿入】」

SE:挿入

【1】

傑「ははっ、すっげー…ヌルヌル……
まだちょっとイってるのかな。
ぎゅっぎゅってしまって……気持ちいい……。
な？　ちゃんと気持ちよくなって、たくさん濡れてれば、
奥まで一気に入れても痛くないだろ？」

SE:ピストン（低速）

傑「いい声、もっと聞かせて。
ゆっくりされるのもいいんだ？
いいよ、じゃあそうしてあげる。
あいつじゃ届かないとこ、いーっぱい突いてあげるから」

傑「ははっ、そんなに良いんだ？　腰、動いてるよ」

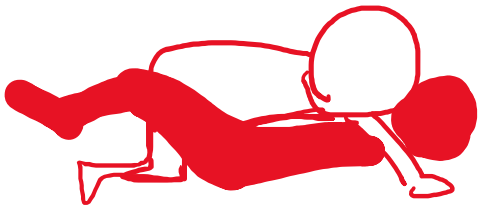
SE:ピストン中速

傑「な？　気持ちいいだろ？　前の彼氏よりも、ずっと、ずーっと」

【ヒロイン、否定する】

【1→3耳元で】

傑「へえ？　否定するんだ。
こんなに濡れてるのに？
さっき二回もイッたのに？」



傑「これじゃ足りないの……？
それとも、無理やりされるのが好き？
あいつ、乱暴なセックスしてたもんね。
君がそうして欲しいって言うなら、いいよ。
縄でも手錠でも使って、君をガチガチに拘束して、
ただの穴みたいに扱ってあげる。
そういう風にしてほしい？」

【ヒロイン、恐怖で固まる】

【1】

傑「【苦笑】そんなに怯えて顔、しないでよ。
君が嫌なら、そんなことしない。
僕はサディストでもなんでもないんだ。
ほら、今だって痛いことはしてないでしょ？
ただ、いっぱい気持ちよくしてるだけ。
ほら、こうして……さ……ね？
奥の方、とん、とん、とん……って。
はぁ……はぁ……あぁ、気持ちい……
腰、止まんないや……！
ごめんね。
ちょっと激しくするね……」

SE:ピストン高速

傑「はは……すごい声。
激しくされるの、気持ちいい？　良い子、良い子。
拉致られて無理やりハメられてるってのに、こんなに乱れるなんて。
天性の淫乱だ（笑）」

【1】

傑「でも、そのぐらいエロい方がいいよ。
僕はこれから一生、君を手放さないから。
そうやって、無理やりされても気持ちよくなれる方が、
君も幸せなんじゃないかな。

傑「……ん、そろそろいきそう？
じゃあ、キスしながら、一緒にイこ♡
ほら、舌出して。
ん、んぅ……」

【傑、呼吸のみしばし。秒数お任せします。不自然じゃないタイミングで次のセリフへ】

傑「あぁ……中、締まってきた……ッ
いきそう？　いきそう？
僕もだ……
もうやば……あ、あぁ……【ヒロインと同時イき】」

SE:ピストン終了

傑「【ため息】……ねえ、同時にいったね。
はは、夢みたいだ。
君とこんな風に、繋がれるなんて……
ああ、疲れちゃった？
そうだよね、起き抜けに無理させてごめん」

SE:ぬく水音

【3　耳元で】
傑「今日は、これで終わりにしようか。
これから毎日、なんどでも、いくらでもできるんだから。
……それじゃおやすみ。
また後でね」

SE：遠ざかっていく足音
SE:ドアの開閉
SE：電子ロックをかける音

トラック4

拉致された翌日。
体を落とされても全然心を開かないヒロイン。
しかし会話の流れで金山も一緒に拉致されていることを知り、必死に金山の命乞いをするヒロインに、傑は「ちゃんとおねだりできたら金山と話させてやる」と切り出す。

SE:扉の向こうからの足音
SE：電子ロックを開ける音
SE:扉開閉

【傑、金山を拷問した直後の疲労を引きずったままヒロインの部屋にやってくる。ヒロインはベッドの上で膝を抱えたまま、しくしくと泣いている】

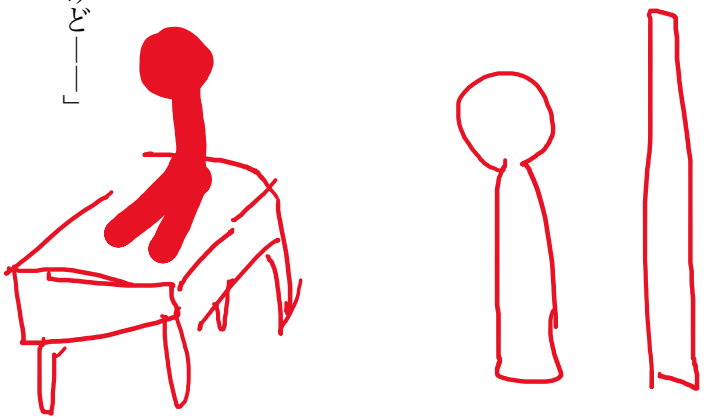
【9】
傑「ただいまぁ。
【鍵をかけるために後ろを向く】
どう？　少しはゆっくり過ごせた？」

SE：電子ロック閉める音

【鍵をかけ終え、ヒロインに向き直る傑】

SE:近づいてくる足音

傑「こっちはちょっとバタバタしててさ。
帰りが遅くなってごめん。
一応、夕食は好物を手配しておいたつもりだけど――」



【ヒロインが泣いてることに気づき、足を止める傑】

傑「なんだ、まだ泣いてるの？
【自嘲】まあ、当たり前か……
一日や二日で、こんな状況を受け入れられるわけないもんね。
いいよ、大丈夫。君が受け入れてくれるまで、いくらでも待ってるから」

【ヒロイン「ここから出して、お願い」】

【9】

傑「は……？

【失笑】ほんっと……君って呑み込みが悪いよね。
お願いされたくらいで君をここから出すような男が、
そもそも君を拉致して監禁なんてするわけないじゃないか。
まぁ、君のための運動場は用意するつもりだよ。
部屋に閉じこもりっぱなしじゃ体に悪いしね。
春になったらお花見とか、秋になったら紅葉狩りとか……
そういうイベントはちゃんと用意するから」

【ヒロイン「彼氏が通報して、警察が私を探しはじめる」】

傑「【きょとんとして】え？　警察？

【ここから笑いこらえて】彼氏……？
ふ……ふふ……あは、あっははははは！
あーそっかそっか。
それを期待してたのか。なるほどね。
いや、ごめんごめん。
説明不足だったね。
君と連絡がつかなくなれば、
親しい誰かが探してくれるって思うのは当然だ」

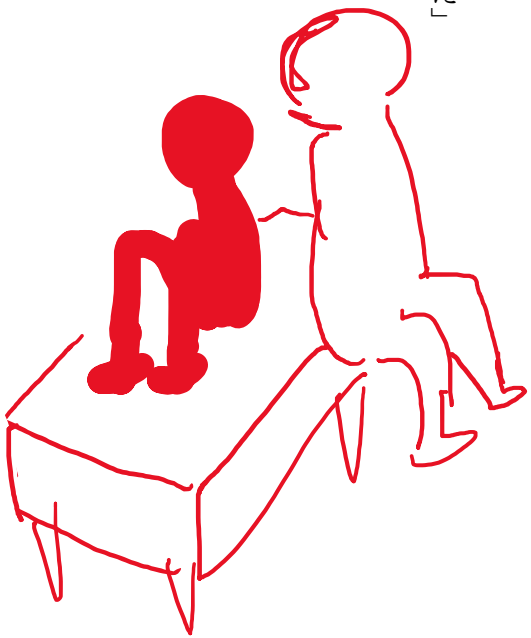
【傑、ヒロインが座っているベッドに腰を下ろす】

SE：近づく足音
SE：ベッドに腰を下ろす

【1　猫なで声】

傑「でもね、そんなことは起こらないんだ。
だれも君を探さない。どうしてだと思う？」

【警戒して傑を見つめるヒロインに耳打ちする傑】



【1→3　耳元でささやき】
傑「実はね、君、もう、死んじゃうんだ」

【ヒロイン、おびえて飛びのく】

SE：飛びのく衣擦れ
SE：ベッドの軋み

傑「君は明日の夜、あのくだらない男と一緒に、
車で海に落ちるんだ。
原因は、あいつの酔っ払い運転かな。
そして数日後に車と死体が発見されて、
君はこの社会からいなくなる。」

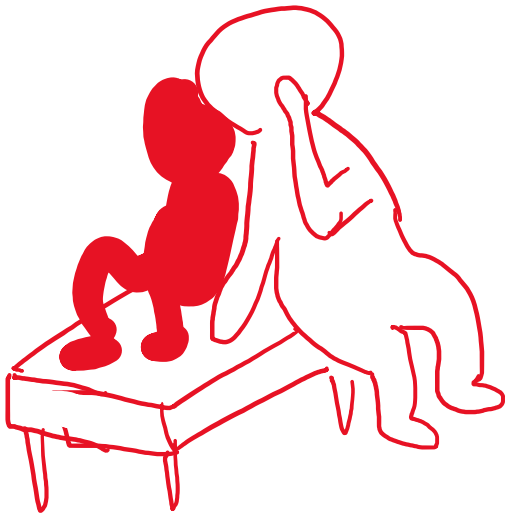
傑「できるはずないって思うよね。
そんな映画みたいなこと……って。
正直、僕も思ってる。
でも、できるんだ。実際にやったこともある。
社会にとって君なんて、それくらいちっぽけで、
どうでもいい存在なんだよ。
僕以外にとっては、ね」

【傑、震えあがるヒロインをしばらく見つめ、一転して明るく笑いだす】

【1】

傑「ふ、ふふ……あっはっは！
なーんてね！
びっくりした？
そんなに怯えなくて大丈夫。
もちろん、本当に殺しちゃうわけじゃない。
ただ、戸籍上は死んだことになるってだけ」

傑「こうした方が、君にとってもいいんだ。
だってこうすれば、いつまでも帰ってこない君を
心配する人間はいなくなる。
君の身内も、少しすれば心の整理がつくはずだから」



【ヒロイン「金山くんはどうなるの」】

【傑、金山に言及され、不機嫌になる】

【1】

傑「金山……？」

【そっぽを向いて】

傑「あいつがどうなるかなんて、
君にはもう関係ないだろう。
明日にはもう死んでる男のことなんて、
話題にするだけ時間の無駄だ」

【ヒロイン「死んでるって、どういうこと？」】

【ヒロインを見て】

傑「だから……さっき説明しただろ？
君は酔っ払い運転で海に突っ込んだ金山の
道ずれとして死ぬことになるんだ。
君の死体は偽物を用意するけど、
金山の死体は本物を使う」

【ヒロイン「どうしてそんなことを……！」】

傑「【いらだって】当然だろ……！
僕があいつを許すわけないじゃないか。
あいつさえいなければ、
僕らは普通に出会えたんだ。
普通に出会って、恋人同士になって、
みんなに祝福されながら結婚できた！
お前もお前だ！
ちょっと押されたくらいで、簡単にあんな男に引っかかって……！
世間知らずで、お人好しで……そういうところがかわいいって思うけど、
でも、そのせいで僕以外の男の恋人になるなんて……！」

【ヒロイン、必死で金山の命乞いをする】

【1】

傑「うるさい、うるさい、うるさい……！
あんなやつの命乞いなんて聞きたくない！
なんでわからないんだ……！
あいつは君を大事にしてなかった。
君はずっと、あいつに馬鹿にされてきたんだ！
それなのに、どうして……！」

【ヒロイン「死ななきゃいけないほど悪いことはしてない」】

傑「【暗く】あぁ……そう。
どうしても、あいつを助けてほしいんだ」

【ヒロインうなずく】

SE：うなずく衣擦れ

傑「はっ……いいよ、わかった。
チャンスくらいはあげてもいい。
ただし、ちゃんと上手におねだり出来たらね」

【ヒロイン「おねだり？」】

傑「【猫撫で声で】そう、おねだり。
かわいい君が一生懸命おねだりしてくれたら、
あいつの声を聞かせてあげる。
……命？　うーん、そうだなぁ……
あんまり気は進まないけど、君の頑張りによっては考えるよ（大嘘）」

【3　耳元】

傑「どうする？　やる？」

【ヒロイン、うなずく】

【1　不機嫌】
傑「君って、本当にあいつが好きなんだね。
【吐き捨てるように】どうかしてるよ、ほんとに……
まあいいや、ほら、始めて」

【ヒロイン、何をすればいいか分からずもたつく】

傑「【面白がるように】どうしたの？
何もしないの？
やっぱり、気が代わった？
あんな男のために、拉致犯でレイプ犯の僕に
かわいく媚びて見せるなんて、君には無理だよね。
いいんだよ、別に。無理しなくても」

【ヒロイン、次のセリフの途中でやけくそでキスしてくる】

傑「あのどうしようもない男をさっさと処分できるんだから、
僕としても助かるし――んぅ……！？」

SE：衣擦れ
SE：ヒロインが体重移動するベッドの軋み

【1　至近距離】
傑「【キスしながら】ん……ちゅ……キスしてくれるの？
はは、かわい……
いいね、もっとちゅーしてよ。
あいつにしてたより、もっと濃厚なやつ。
あーむ……ちゅ……」

【ディープキス15秒程度】

【1　至近距離】
傑「あぁ、上手……やらかい舌が、一生懸命動いてて……
はぁ、ヤバい、我慢できなくなるかも……
お願い、もっとして
いっぱい僕の口の中、犯してよ」

【ディープキス３０秒程度】

【ヒロインから濃厚なキスをしてもら、ふわふわとして、うっとりとした心持になる傑】

傑「あ〜……僕、幸せでどうにかなりそ……
ねえ、他にはあいつに何してあげた？」

【７　耳元で】

傑「【甘えるように】
教えてよ。
君があいつにしてやったこと、
全部僕にもしてほしい。
【脅すように】まさかキスだけなんて、言わないでしょ？」

【ヒロイン、渋々傑のズボンを寛げる】

SE:ゴソゴソ

【８　下見ながら※素人童貞なのですぐ気持ち良くなります】

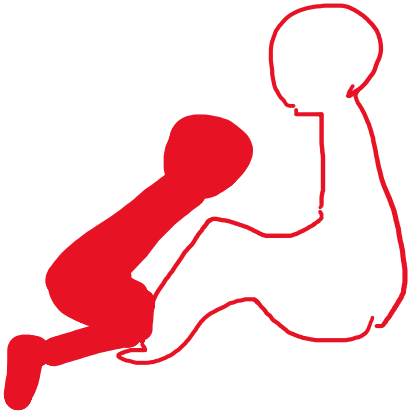
傑「ふぅん。そこ、触ってくれるんだ。
【陰茎に触れられて】んっ、あぁ……
君の指、すごい、きもちい……」

SE：上下にしごく

【ヒロイン手コキしつつ「痛い？」】

【１】

傑「ううん、痛くない……
もう少し強くても大丈夫。
あぁ、うん、すごくいい……っ
もっとして、もっと……っ」



【ヒロイン、手コキしつつフェラ】

SE：フェラの水音

傑「うぁっ……それ、ヤバ……！
あ、あぁ……すご……
手と口で同時にされると、もっと気持ちいい……！
こんなこと、あいつにもしてたんだ？
本当、妬けちゃうな……
これからは、僕だけだからね……！
こんなこと、君にしてもらえるの……僕だけだから……ッ」

傑「ね、言って。
『これから私は、傑くんとしかえっちしません』って……言って」

SE：フェラ&手コキストップ

SE：ヒロインが顔を上げる衣擦れ

【ヒロイン、望まれたセリフを言おうとするが、言葉が出てこない】

【1】

傑「【少し萎えて】……どうしたの？　固まっちゃって。
まさか言えないの？
じゃあ、もうおねだりはおしまいにする？
僕は別に、それでもいいけどね。
別に言葉にしてもらわなくても、
君がもう、僕としかえっちできないのは分かり切ったことだし……」

【ヒロインが金山のために媚びるのをやめたと思ったら、急に気分がよくなってくる傑】

傑「あんなくそ野郎のために、嫌な思いする必要なんてないって、
君がやっと気づいてくれたってことだもんね。
息の根を止める前に、教えてやらなくちゃ。
お前の元恋人は、もうお前なんかどうでも良くなったって！」

【ヒロイン、慌てて金山の命乞いをする】

傑「【ふてくされたように】えぇ……？
あっそ。結局、あいつの命乞い、続けるんだ。
まぁ、いいよ。ちょっとなえちゃったけど……。
じゃあ、聞かせてもらおうか。
僕に続いて繰り返してね。
ほら、こっち見て。笑って、笑って～」

SE:スマホの録画開始

【一言一言区切って、ゆっくり言ってください】
傑「『わたしは』　『これから』　『一生』　『傑くんとだけ』　『エッチします』」

SE:録画終了

【1】
傑「【子供を褒めるように】いい子いい子！
ちゃんと言えたね。
あ、さっきとちょっと違うの、気づいちゃった？
いいじゃん、こっちの方が僕は好き」

傑「これ？　録画。
せっかくだから、記録に残しておきたくて。
あとで編集して、僕の声は消すんだぁ。
そんなに恥ずかしがらないでよ、他の人になんか見せないし。
当然でしょ、これは僕だけが楽しめればいいんだから」

傑「それより、続きはしてくれないの？
さっきみたいに、君のかわいい口で、僕のを舐めてよ。
いいでしょ、もう一回！」

【フェラ再開】

SE：フェラの水音

【1　上から】
傑「あっ……気持ちい……
うん、んん…やっぱりいいな……
一生懸命、僕のを口いっぱいに頬張って……はは、かーわいい。
柔らかくてあったかくて……はぁ、すご……」

【吐息のみしばし。秒数お任せしますので、よきタイミングで次のセリフへ】

傑「ヤバい…ねぇ、もう出していい？　出していいよね？
ごめ、いっぱい出ちゃうかもだけど……っ
あ、あぁ……！」

【射精】

SE：ヒロインが口をはなす水音

【1】
傑「あー、口のなかに出しちゃった。
もうちょっと楽しみたかったんだけど……
ねぇ、口開けて見せてよ。
あぁ、すごいな。
君の口の中、僕が出したのでどろっどろ」

傑「じゃあ、今度は口閉じて。
はい、そのまま、ごっくん……」

【ヒロイン、苦労して飲む】

傑「はは、飲んじゃった。
不味かったよね、喉、気持ち悪い？
ごめんね、今お水飲ませてあげる。
口移しで、ほら。
【コップを手に取り、口移し】ん……んぅ……」

【10秒程度、口移しで水を飲ませる】

【褒め】

傑「はい、上手に飲めました。
もう少し飲む？　もういい？
そっか」

SE：頭をなでるSE

【傑、ヒロインの頭をよしよし撫でる】

傑「よしよし、頑張ってくれてありがと♡
すっごく可愛かったよ。
じゃあ、約束通り、君にチャンスをあげなくちゃね。
君が彼氏を助けられるチャンスを、さ」

傑「ちょっと待ってて。今から電話かけるから」

【ヒロイン「電話？」】

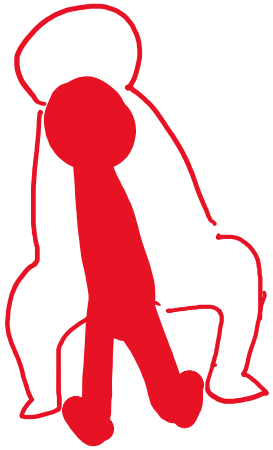
【1】

傑「そう。君があいつと電話で話して、
あいつに生きる価値があるって僕にわからせてよ。
そうすれば、解放まではしてやれないけど、
雑用として生かしておいてやるくらいはできるかもしれない」

【ヒロイン「でも、そんなのどうやって……」】

傑「さぁねぇ……方法は君に任せるよ。
でも、まぁ僕もそこまで鬼畜じゃないからね。
あいつが自分より君の心配をするとか、
その程度のことで良心が目覚めるかも」

傑「だから、電話してる間はここに座ってね。
僕の足の間。
君とアイツの会話が、ちゃんと全部聞こえるように」



【スマホで金山に発信】

SE:スマホ指で叩く

SE:発信音

●トラック5

トラック4の続き。
金山との通話中、イクのを我慢で着たら金山を助けてやるとヒロインに持ち掛ける鷹司傑。
しかし金山は「傑が気分よくなれば、自分は生きて返してもらえる」と思い込んでおり、電話越しに快楽をこらえるヒロインに「はやくイけよ」と急き立てる。

SE:発信音

【傑、ヒロインを背後から抱きすくめながら、電話先にいる部下に状況を告げる】

【6　電話口】
傑「あぁ、もしもし。そっちの調子はどんな感じ？
まだ殺してないよね？
そっか、よかった。
いや、彼女がそいつとちょっと話したいらしくてさ。
気絶……？
水でもなんでもぶっかけて、目を覚まさせたらいいだろ、そんなの。
っていうか僕がいない間、余計なことしてないだろうな。
わかってるよな？　そいつの死体はちゃんと使うんだから、
不自然な骨折とかがあると、都合が悪い。
うん……うん……。
じゃあ、彼女に代わるから」

【6　ヒロインを見ながら】
傑「はい、どうぞ。
じゃあ、せいぜい頑張ってね♡」

【ヒロインがスマホを受け取り、左耳に当てる】

【3】
金山「【苦しげな呼吸十秒程度】」

※金山、常に痛みでイライラしててください

【金山、「電話に出ろ」とだけ言われて電話に出ているため、相手が誰だかわかっておらずおずおずしている】

【3】

金山「も……もしもしし？」

【ヒロイン「晃なの？」】

【金山、通話先がヒロインなことに気づき、ややホッとする】

金山「な、なんだ……お前か」

【ヒロイン「大丈夫？」】

金山「大丈夫なわけねえだろ……ッ！
なんなんだよ、これ……！
なんで俺がこんな目に……！
くそっ、あちこちいてぇ……」

【ヒロイン「何かひどい事されたの？」】

金山「は？　ひどいこと……？
何ぬるいこと言ってんだよ！
俺は殺されかけてるんだぞ！
なのに、何だよお前……暢気そうな声出しやがって！
全部お前のせいなのに！」

【ヒロイン「落ち着いて、話を聞いて」】

金山「落ち着けるわけないだろ！
こんな状況で！
そりゃお前は落ち着けるよな。
お前は〝ひどい事〟なんて、何もされてないんだから！」

【3】
金山「【急にすがるように】なぁ、あの人に説明してくれよ。
俺はほんとは、お前の彼氏なんかじゃないって……！」

金山「俺とお前は、ただの友達だった。そうだろ？
怪しい男に絡まれたと思ったから、
一瞬彼氏にふりをしただけだ。
あいつはお前と付き合うために、こんなことまでする異常者だ。
お前がかわいくねだって見せれば、
きっと俺のことなんてどうでもよくなる……！
な？　頼むよ。頼むから……！」

【6】
傑「あーあ……全然ダメだな。
生かす価値ゼロ」

【ヒロイン、慌てて受話器の口をふさぎ、「今は少し興奮してるだけだからあ、もう少しチャンスをください」と懇願する】

傑「えぇ……？　まだがんばりたいの？
どうしようかなぁ。
僕、少し飽きてきちゃったし。
そうだな……少し、悪戯してもいい？
そしたら、もう少し茶番に付き合ってあげる」

【7　ひそひそ声で】
傑「【耳に息を吹きかける】
ふふ……どうしたの？
ほら、頑張って彼氏君は生きる価値がある人間だって、
僕に納得させてよ。
あーむ……れろ……【ここから耳なめ】」

【7　耳をなめながら】
傑「諦める気になったらいつでも
電話、切っちゃっていいからね」

【傑、耳舐めのみ３０秒程度】

【３】

金山「おい、なんで急に黙ったんだよ……！
怒ったのか？　なぁ、俺のこと、見捨てないよな？
何か言ってくれよ……！
俺のこと助けるって、言ってくれよ……！
死にたくないんだ、頼む、死にたくない……」

【金山、すすり泣きのみ３０秒程度】

【７】

傑「んー？　結構声、変わらないな。
もしかして、耳舐められるだけじゃ、物足りない？
いいよ。
じゃあ、下の方も触ってあげる」

ＳＥ：触れる水音
ＳＥ：ゆっくり目にネチネチ

傑「はは、ぐしょぐしょだ。
こんなに我慢してたのに、気づくのが遅れてごめん♡
ねぇ。
そいつ泣いて命乞いするばっかで、つまんないね。
君が今何を思って、どんな状況にいるのか、
少しも想像できてないんだ。
気づかせてやろうよ。
君が僕に強姦されながら、君を必死に助けようとしてるんだってことを
……っさ！【背面座位で奥まで挿入】」

【7】
傑「あ、は……きもち……
君の中、もうトロトロだ。
かわいいね♡
えっちだね♡
大好き、大好き……♡」

SE:ピストン（ゆっくりネチネチ）

【傑、控え目な吐息のみ、1分程度】

【3　怪訝な様子】
金山「……おい、これ、何の音だ？
お前……もしかして、一人じゃないのか？
そこにあの人がいるんだな？　なぁ！」

【金山、自分がプレイの道具にされてることに気づいて「これで傑が機嫌よくなれば助けてもらえるかも」と考え、テンション上がる】

金山「よかった……！
俺は全然気にしないから、思いっきりサービスしてやれよ。
声も押さえなくていい。
気も持ちよくなくても、感じてるふりするんだ。
俺のことが好きなら、できるだろ？」

金山「そうそう、その調子。
ってか、お前……
【嘲笑】マジで感じてるのか？」

【3】
金山「声抑えきれてないし、通話でもめちゃくちゃ濡れてるのがわかるよ。
そっか……俺の時より、気持ちいいんだな。
いや、いいよ、それでいい。
俺はもう、お前のことなんてどうだっていいんだ……！」

金山「お前だって、あいつのこと好きになった方が、色々得だろ？
大金持ちみたいだし、顔もいい。
ヤってる最中に男が喜ぶセリフなら、俺が教えてやっただろ？
ほら、言えよ……！
きもちいい、愛してるって、言ってやれ……！」

【傑、金山が調子に乗ってヒロインに指図するのでイラついてくる】

【6　不機嫌】

傑「……喋りすぎだな。
ほら、スマホこっちに貸して。
通話入れっぱなしで、その辺に置いとけばいいよ」

SE:スマホ取り上げる
SE:ベッドにスマホぽい

傑「ねぇ、本当にこの男が好きだったの？
自分の恋人が犯されてるってのに、
保身ばかりで必死な、こんな男を？」

【ヒロイン泣き出す】

【慌てて慰める】

傑「ああ、ごめん。責めたわけじゃない。
選ぶべき相手を間違えることなんて、
普通にあることだし…大丈夫だよ。
ほら、泣かないで。
僕がもっと気持ちよくしてあげるから」

SE:ピストン加速

傑「はぁ、はぁ……はは、すごい音。
こんなにエッチな音出してたら、もう声を我慢してても意味ないね。
……っ、中、きつくなってきた。
元彼に聞かれながら犯されるの、気持ちいいんだ？
はは、良かった。君、淫乱なんだね」

【ヒロイン、否定する】

傑「違う？　そう？
じゃあ、このままイったりしないよね？
――そうだ、いいこと考えた」

【7　思い切り声をひそめて】

傑「君がこのままイかずに我慢できたら、
あいつのこと、殺さずにおいてあげようかな。
どうする？　やってみる？
ははっ、自信ないの？　かわいい（笑）」

傑「でも、あれを助けるには、挑戦するしかないんだよ。
君がイく前に僕が満足したら、君の勝ち。
あいつも助けてあげるし、君のことも介抱してあげる。
僕に犯されても、気持ちよくないんだもんね？
本当にそいつが好きなら、我慢できるもんね？」

【6　普通の声量で】

傑「よーし、それじゃあ……頑張れ♡頑張れ♡
ほら、ほら。奥の方、とん、とん、とん、とんって。
こーら、ダメだよ。腰逃がしたら。
僕を早くイかせたいなら、自分から腰振るくらいじゃないと」

SE:ピストン加速

SE:水音

【傑、吐息のみ３０秒程度】

【ヒロイン、すぐにでもイキそうでずっと「嫌」と「やめて」を繰り返す】

【6】
傑「嫌？　やめてほしい？
なんで？　まさかイキそうなの？
あぁ……あいつ、さっきから、
スマホの向こうでぎゃあぎゃあ言ってるな……
何を言ってると思う？」

【傑、ベッドサイドのテーブルに置いたスマホに手を伸ばす】

【6→4　11を見ながら】
傑「スピーカーにしてあげるから、聞いてみなよ」

SE:スピーカオン

【金山、ヒロインが屈しないと死ぬと思ってるので必死に】

【11　ベッドサイドのテーブルのスマホから】
金山「この馬鹿女……！
何が〝嫌、やめて〟だよ……！
お前のそういうかまととぶってるところ、
マジで萎えるって言っただろ！」

【4】
傑「【嘲笑】ハッ……！
彼もそう言ってることだし、もういいんじゃない？
さっきからずっと、いやいや言ってるわりに、こんなに締め付けて、
本当はそいつのことなんか、もうどうでもいいんだよ。
ただ、ここで彼を見捨てたら自分が悪いやつになっちゃうから、
意地になって僕を拒んでるだけ」

【4】
傑「【優しく言い聞かせる】でも、大丈夫。
もう君は、二度とここから出ていけない。
君を愛してる僕と、ずっとずっと、二人きり。」

傑「ここには誰も、君のことを責める人なんかいないし、
彼を見捨てたこともわからない。
ね？　僕と一緒に、悪い子になっちゃおうよ」

傑「我慢するの、そろそろ限界でしょ？
ね、イっちゃおう？
思い切り気持ちいい声出して、彼を安心させてやればいい」

【優しい→命令口調】
傑「さぁ、イって。
ほら、イけよ！　イけ、イけ！」

【ヒロイン絶頂】

傑「【フィニッシュの息遣い】」

SE:ピストン終了

【4】
傑「……は、は、ははは っ！
あーあ、イっちゃった。
惜しかったね。君がもう少し我慢できてれば、
あいつは生きていられたのに」

【11　その辺に置かれていたスマホから】
金山「は……？
な、なんだよそれ……どういうことだ？」

【傑、電話の向こうの部下に指示を飛ばす】

【4　11に向かって】
傑「おい、聞こえてるか？
そいつのことは、もういい。
そっちで処理しろ」

【11】
金山「待ってくれ！　嫌だ！　嫌だ、死にたくない！
助けて、助けて……！」

SE:通話終了

【4　泣き始めたヒロインに向き直る】
傑「……そんなに、泣かないでよ。
あいつ、ちゃんと苦しまずに死なせてあげる。
僕としては気に食わないけど…」

傑「【優しく言い聞かせる】それで君の気持ちが少しでも楽になるなら、
我慢するから。
ね？　だからもう、安心して一回眠るといい。
次に起きた時は、きっと何もかも大丈夫になってるよ。
さ、おやすみ。僕の運命の人♡【3　耳にキス】」

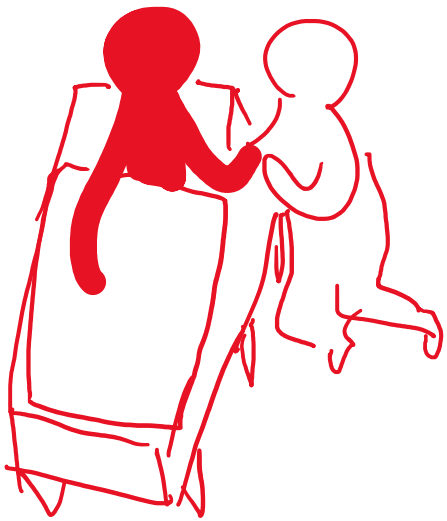
トラック⑥

数日後。
ヒロインを薬で何もわからなくした傑。
人形のようになったヒロインに、優しく、穏やかに、一方的に語りかける。

SE:扉の向こうから足音
SE:解錠
SE:扉の開閉
SE:寄ってくる足音

【10　部屋の中のヒロインに話しかける】
傑「ただいまー……
どう？　今日も一日、いい子にしてた？」

SE:ヒロインの寝ているクソデカベッドに腰を下ろす



【2】
傑「【自嘲ぎみに】なんて……してたに決まってるよね。
今だって全然体に力入ってないし、ずっと寝てたんでしょ？
よしよし、お薬ちゃんと飲めててえらいね。
お医者さんがちゃんと君の調子を見てくれてるから、心配いらないよ」

【1】
傑「一生、夢を見てるみたいな気分で、僕の愛だけ受けて過ごさせてあげる。
家族のことも、友人のことも、元彼のことも、ぜーんぶ、考えなくて済むように。
君だって、その方がいいでしょ？
何も分からなければ、悲しむことも苦しむこともないんだから。
気持ちいいことだけ感じて、毎日柔らかいベッドの上で過ごそうね」

傑「……今日はどの本を読んであげようか……
うちにあるやつは、大体もう読んじゃったなぁ。
明日にはたくさん取り寄せておくから、許してよお姫さま【額にキス】」

【返事はない】

傑「……ははっ、もう君は何にも分からなくなっちゃったのに、
僕はどうして、こんな風に話しかけ続けちゃうんだろうね？
……ねえ、君はこんなの納得いかないだろうけど、
一応僕にだってちゃんと、言い分はあるんだよ」

傑「【穏やかに】そうだ、今日は僕の家族の話をしてあげる。
君もそのうち紹介しなきゃいけないし、ちょうどいいでしょ」

傑「僕にはね、兄と父がいるんだ。
お母さんは、結婚してから割とすぐに死んじゃった。
なんでかって？
うちの一族はね、誰も彼も頭がおかしいんだ。
相手が自分の唯一だと確信したら、自分のものにせずにはいられない。
身も、心も。
母さんはそれで心を病んで、あっという間に…ね」

傑「父さんも随分悲しんでいたけど、本当に可哀想なのは母さんだ。
好きでもない男に誘拐されて、強姦されて。
僕らを産む時、どんな気持ちだったんだろうね。
この世から早めに退場したくなるのも、無理はないと思わない？」

傑「でもね、相手の幸せを思って身を引くなんて、父さんにはできなかった。
僕だってそうだ。君の幸せをぐしゃぐしゃに壊してでも、僕の幸せが欲しかった」

傑「相手の意志なんて、関係ない。
可哀想な運命の人をちゃんと捕まえて置けるよう、
僕らはこうしてしっかりと、お金を稼いでおくんだ。
おかげで……【くすっ】ほら、もう君は逃げられない」

【独り言っぽく】
傑「……知ってたんだ。父さんみたいにしちゃダメだって。
無理やり監禁したって、愛してもらえないのはわかってたのに。
僕は、僕だけは、運命の人と二人で幸せになろうって、決めてたのに。
【疲れ】本当にどうして、こんなことになっちゃったんだろうね」

【憔悴】

傑「ごめんね、せめて君がずっと夢の中に居れるよう、
ちゃんとお薬を飲ましてあげるから。
君はずーっと、ずーっと、このままでいいから。
何も思い出さなくていいし、僕の方を見なくたっていい。
ここにいてくれるなら、それだけで十分だから」

傑「だからずっと、僕の元を離れないで。ね？【唇にキス】」